

猫のようである。それが庭の茂みから顔を覗かせていたかと思うと、スッと立って現れた。驚いたことに、近頃道頓堀の芝居小屋で評判を呼んでいる、今様の娘歌舞伎のなりで鼓を持って現れた。猫だから猫の手振りでポンポンと鼓を打ちながら、何やらおかしなことに、庭の真ん中で舞い出したのである。

「なんと面白い、猫の幸若舞じゃ」と、小春は座敷の中から見つめている。すると、茂みからもう一匹現れた。「あ、白ぎつねっ！」と小春が呟いた瞬間、その狐のような生き物がフワッと浮いたかと思うと、ポンッと大きく鼓が鳴って、猫も狐も一瞬に消えた。

「如何でした。お正月じゃから、目出度いものと思ひましてな」

何時の間に入ってきたのか、安倍野童子が座敷の外の縁の端に座っている。

「やはり、童子でしたか。この見世物、道頓堀で流行るかもしれませぬな」

「いやいや、我らの芸は所詮、そこらの大道芸、今を時めく竹本座の竹田出雲様の御内儀にお見せするのは失礼でござったかな」

竹田出雲、この時45歳。もう20年近く人形浄瑠璃の竹本座の座元を勤めている。興行師であり演出家であり、また劇作家でもある。1685年(貞享2年)、道頓堀で竹本義太夫が旗揚げした竹本座は、近松門左衛門の脚本と竹田出雲の巧みな演出で、大坂を代表する芝居小屋になった。近松が「曾根崎心中」や「冥土の飛脚」「心中天網島」といった世話もので描いた浪速の義理と人情の世界は庶民の魂をしつとりと捉え、大阪庶民を元禄という時代の主役に押し上げたのである。

「ところで童子丸は大きゅうなりましたかな」と、安倍野童子が小春に訪ねた。

「やはり、お前様も人の親じゃな。正月が来れば子のことが気にかかると見える」

「ははは……、童子丸の母は葛の葉でござるが、生憎と父親は何処の誰やら……」

葛の葉と童子丸は、何年前かに安倍野童子が出雲の元へ連れてきて、それ以来小春が預かっている。訳は聞かない。商売がらか、出雲の元には様々な人物が出入りする。声聞師や説経師や傀儡師といった草芸人、中には世間に出入れぬものもやってくる。妻の小春は、出雲の頼みで彼らの面倒をみてやっていた。陰陽師と自ら名乗る安倍野童子もそんな一人である。生業はおそらく名乗りから見て阿部野の安倍寺の雑役に奉仕する非人達の頭と思われるが、諸国を巡りながら、占術、呪術、あるいは天文、暦数、風水、宿曜(すくよう)などの陰陽術を駆使して、時に高額な祈祷料や占断料を請求する怪しげな陰陽師たちの一人であろう。

童子丸は不思議な子である。気味が悪い、と思うことさえある。普通の子のように笑わない。まだ3歳の子だが獣のような眼光をしている。犬さえ童子丸に見つめられると尾を巻いて逃げる。その子を連れて四天王寺へでも行ったものか、生憎と、母の葛の葉も童子丸も今は居ないようである。

「此度は関東を旅しておりました」と、安倍野童子が言った。

「江戸では忠臣蔵という新作歌舞伎が人気を呼んでおりましたな。先年の赤穂浪士の方々の、吉良様への仇討ちを描いたものです」

「赤穂浪士……？、あの浅野のお侍方の……。あんなものはお武家の忠義とやらの面白うも無い生き方を描いたもの、大坂では、まあ流行りませぬなあ。紀州様が將軍様になりはってからは、心中物や華美な芝居は一切御法度、何かと言えば忠孝第一の、質素儉約のと、ほんに芝居は遣りにくい。旦那様も、世間の人の心を打つような芝居を揚げたいと苦心のようだけど、なかなか思うようには行かないご様子」

「されば、これは今お江戸で評判になっている草双紙です。お役にたてばと思うて持ってまいりました」

言いながら童子が懐から一冊の本を取り出すと、畳の上に置いた。それがフワリと浮いて、座敷の中をクルクル回ったかで見ていると、小春の膝の上に、トンと舞い降りた。表に「安倍清明物語」と書いてある。

作者不明の仮名草子「安倍清明物語」は1662年(寛文2)に刊行されているから、1734年(享保19)に初演された竹田出雲作の「芦屋道満大内鑑」がその影響を受けたことは間違いない。これは不思議な物語である。安倍清明の一代記が、古今の説話や物語を取り込んで巧みに語られるが、肝心の清明の出生譚の部分は極めて粗略な内容になっているのである。

「遙かな昔、安倍仲麿と吉備大臣は遣唐使として唐に渡るが、仲麿は唐の政治に従わないことを咎められ、食を絶って死に鬼となった。一方、吉備大臣は数々の試練を鬼の仲麿や長谷寺観音の助力で見事に克服し、無事に帰国を果たして皇帝から与えられた陰陽道の真髓を記した書物を持ち帰り、阿部野に住む仲麿の縁者に与えた。

時代が下って村上天皇の御世、仲麿の子孫の安倍保名の元に若い女性が訪れ、保名の妻になり男子を産む。男子は童子丸と名づけられたが、童子丸が3歳の夏、母は一つの歌を残して、姿を消してしまった。

残された童子丸はある時竜宮の乙姫の変身した小蛇を助けた縁で竜宮に招かれ、竜王の秘符をはじめ数々の宝物をもらって帰った。そのため彼は神変の能力を身につけることが出来、家に伝えられていた陰陽道の書物も学習して天子に認められる易暦博士になる。その後は播磨の道満法師との術比べに勝ったり、数々の不思議な術を駆使して陰陽師として名を高めていった - -」

「そのご本、何やら面白いことが書いてありますなあ」と、後ろで声が聞こえた。

小春が振り返ると、葛の葉が部屋の隅で行灯に灯を入れている。

「葛の葉か。童子丸はもう寝たんか」

へえ、さっき寝付きました、と葛の葉が答えた。何時の間にか、この女は小春が文机の上に広げている仮名草子を読んだらしい。行灯に灯が入って葛の葉の影が壁に大きく浮かび上がった。

「この話、なんかけったいやなあ。安倍清明はんの物語やろ。昔のことや父親のことは詳しいに書いてあるのに、母親のことは名前も書いてあらへん」

「母親は、自分の名前を名乗れんかったと違いますやろか」と、葛の葉が言う。

「女将はん、私の村には安倍清明はんの古い言い伝えがあるんどす」

葛の葉の生まれた村は、泉州の信太村と安倍童子が言ったのを小春は思い出した。
「言い伝えでは、清明はんの母親は信太の狐やということです」

「狐……？」

「へえ、狐です。ある時信太村を通りかかった安倍保名はんが、狩人に追われた白狐を助けて逃がすんやが、保名はんは追ってきた狩人たちに責められて深い傷。難渋しているところへ現れた葛の葉と名乗る娘が介抱して、やがて夫婦となった二人から生まれた子供の名が童子丸。童子丸が3歳の秋の日、庭の美しい菊の花に心を奪われた葛の葉は狐の本性を童子丸に見られ、泣く泣く信太の森に帰って行くんです……」

「その葛の葉が、白狐という訳か。それでは、お前も白狐かいな……」

小春の冗談に、へえ、と言いながら葛の葉がこちらを向いた。驚いた小春の目に障子に映る葛の葉の影が、狐の姿になって揺れている。

「女将はん、私は本当の名前なんか知りまへん。いえ、本当の名前なんかないのどす。私の村では自分の出自や親の名前を人に言えんさかい、みんな母親の名前を葛の葉と言うんどす。葛の葉という名前の狐の子やと言うんどす。葛の葉は娘になったらみんな遠い国に売られていくんです。信太狐の話はそんな悲しい私らの定めが生み出した物語なんどす」

「そうかいな。童子丸の母親は葛の葉という名の狐かいな。そやけど父親はどこの誰やら……」

「いいえ、この子の父親の名は分かっています。女将さん、竹田出雲というお人が、前に熊野詣出をしはったことがありましたやろ。その時、泉州は信太村で葛の葉という娘と一夜を過ごしはって、生まれた子供が童子丸……」

この女は何を言うやら、アホらしい。竹田出雲は私の夫やないか。もしやと思うたけど、この女は狐や、おお怖やの、ほんもんの白狐や……！。

何やら行灯が薄暗くなってきたかと思うと、何処からか浄瑠璃節が聞こえてくる。

妻は衣服をあらためて しをしをしおと奥より出で 臥したる童子抱き上げて

部屋の襖が次の間、中の間と自然に開き、葛の葉が童子丸を抱きかかえて……、

「女将さん、童子丸は3歳になりました。葛の葉は信太の森へ帰らなあきまへん」

悪あがきをふつつりとやめ、手習い学問精出して さすがは父の子ほどもあり 器用者よと誉められよ なにをさせても埒あかぬ 道理よ狐の子ぢゃものと 人に笑はれ誹られて 母が名までも呼び出すな

突然、葛の葉が口に筆を咥えて、何やら奥の襖に書き出した。驚いた小春が思わず立ち上がった瞬間、髪振乱し振り向いた葛の葉の顔が狐 - - !、いきなり、ポンと鼓が鳴って童子を置いて葛の葉は消えた。そして墨黒々と、襖に歌が残されていた。

「恋しくば尋ね来て見よ 和泉なる信太の森のうらみ葛の葉」

竹田出雲の時代物浄瑠璃「芦屋道満大内鑑」が、竹本座で初演されたのはその年の暮れである。大筋は「安倍清明物語」と同じだが、出生譚の部分は葛の葉が語った信太狐の伝説に変わっていた。近年はその「葛の葉子別れ」の場面だけが単独で上演されることも多い。
(終わり)



12月12日 和泉の国 黄金塚古墳と信太山の伝説

狐女房、女性が狐に変身する怪しくも不思議な光景、レトロな色調のオドロオドロした絵、幼い頃の記憶の中に残る怪奇物語、でもそれはたぶん歌舞伎とか文楽で脚色された話のもとになっているんです。その奥にはもっと豊かな伝説の世界が広がっているということ、12月の冊子の細居さんの「信太葛の葉...」で知りました。この信太狐の伝説が生まれた所をこの目で見たい、それが今回の僕のテーマです。

で、師走の一日、和泉平野を眺めながら信太山丘陵を信太狐の故郷を求めて歩きました。そして、聖神社、確かに周囲に残る雑木林は狐の故郷に相応しいし、参道入口の狛犬は狐の姿に変身しているし、なにより「信太の森ふるさと館」なるほど、ここに違いない、と思ったら、細居さんが聖神社の参道での解説で、「信太狐の伝説が生まれたのはこの下なんです」と言ったんです。

うん、この丘の下は和泉の町、確かに小栗街道は延びているけど、この下に何があるのか。赤い屋根のラブホテル.....?、ラブホテルで生まれた子供は人には言えない狐の子.....?。うーん、そういうことか.....、しかし、これは謎だ。大きな謎だ。

で、僕は、もう一度信太山に行ってみたくです。まずはJR北信太駅の向こうの「信太森神社」。ここには狐が自分の姿を写した「姿見の井戸」とか、葛の葉姫が変身した「みたま石」とか、安産祈願の「子安石」とか色々ありましたが、どう考えてもこれは芝居の小道具でしょう。ここではない。で、もう一度地図をよく見ると、尾井町のあたりに「旧府神社」とあるのが。ちょうど信太森神社と聖神社を直線で結んだ真ん中あたり、小栗街道の呉服屋さんの角を少し駅の方へ曲がった所、煉瓦塀と古い民家、小さな祠と古い鳥居。前には但馬温泉という名のお風呂屋さん。

そうなんです。金田一さん、とうとう見つけましたよ。僕は直感で分かりました。ここが信太狐伝説の故郷に違いない。あの美しい伝説は、この神社を祀る人々が作ったのに違いない。ここからは丘の上に見上げるように聖神社が見えたのではないか。遠い昔、聖神社はここに暮らす人々の支配者だったのではないか。大和朝廷は支配した人々を狐と呼んだ.....。もしかしたら信太狐は、聖神社に支配されていた悲しい人々のことだったのではないか。そう、五木寛之さんの小説に「悲しい人々こそが、美しい伝説を作り出したんです」と、あるように - -。

初めて忘年会に参加している話を聞きましたが、近畿一円から参加されているのに驚きましたね。人の繋がりを感じました。自然観察のサークルの人が次々に誘われて入っていると、YMCAで奥さん同士が友達になって旦那のつながりが出来て入っていると、同じ会社の卒業生同士で親交を暖めるために入っていると、小さなグループが幾つもあって、大きなポアアに会になっている。80歳の方がおられましたね。80歳まで投稿出来たら.....、がんばります。

今回は狐の話ばかりになりましたが、狐年ですから まあ、いいことないか。